

〔国 語〕

○ 実 施 時 間 【8：30～9：20】（50分）

○ 次の注意をよく読んでおくこと。

- (1) 「始め」の合図があるまで問題用紙を開かないこと。
- (2) 問題は 一 ～ 三、20 ページまであります。
- (3) 答えはすべて解答用紙の解答らんにはっきりと、ていねいに書きなさい。
- (4) 答えを直すときは、きれいに消してから書きなさい。
- (5) 内容に関する質問は受け付けません。
- (6) 気分が悪くなったり、トイレに行きたくなったりしたら、手をあげて監督^{かんとく}の先生に合図しなさい。
- (7) 「終わり」の合図があったら、直ちに筆記用具を置き、解答用紙が回収されるまで待っていないさい。
- (8) 解答上の注意
 - ・ 字数指定のあるものは、句読点〔。、〕および「」や（ ）なども一字と数えること。なお、一マスには一字しか入れられません。
 - ・ 文末表現は、「こと」、「から」など、問いにふさわしい形にし、文の終わりには句点〔。〕をつけなさい。

受験番号		氏名	
------	--	----	--

次の——のカタカナを漢字に改めなさい。

① 彼は組織のカンブになった。

② かつて栄えた故郷も今ではカンソンだ。

③ 建物がリンリツしている。

④ この問題はゾンガイ簡単だった。

⑤ 新たな文化をソウシユツする。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

この本の第1章で、それぞれのムスリムはアッラーとの間で契約^{注1}を結び、あの世での救済^{注2}をめざしてこの世を生きていくというお話をしました。その際、あの世での救済はそれぞれのムスリムの個人目標であり、極論すれば、自分さえ救済されればよいということになっていたと説明したと思います。① こうした利己的な考え方にもとづく宗教であるのに、イスラームではなぜこれほど助け合いが活発に行われているのでしょうか。

このことに関連して、私が経験した面白いエピソードがあります。皆さんは「ありがとう」と言つて相手に怒られた経験があるでしょうか。

私はエジプトに調査に行ったときに、現地で調査に協力してくれたエジプト人に「ありがとう」と言つて怒られたことがあります。私はいきなり怒られてとても驚いてしまったのですが、本人に真意を尋ねると、次のように教えてくれました。アッラーの教えには、困っている人がいたら助けなさいという教えがあつて、自分はアッラーの教え＝義務に従つたに過ぎない。『クルアーン』の第2章第276節にあるように、困っている人を助けたらアッラーは恩恵を増やしてくださつて自分が天国に行ける可能性が高まる。自分はそれで満足なのだから、さらに助けた人から感謝されようとは思わない、というものでした。

私は、自分が救われるために困っている人を助けるという考え方に

A

。なぜなら、助け合いというものは、困っている人がいてその人を助けたいという気持ち（これを利他と言います）が先にあって行われるものだと考えてきたからです。

イスラームの助け合いは、そうした私たちの常識とは正反対のもので、自分が救われたいという利己的な思いが先にあつて、その目的達成の手段として人助けが行われているに過ぎないのです。しかし、結果としては、困っている人に救いの手が差し伸べられていますね。私はこうしたイスラーム独自の助け合いの考え方を、利己的利他精神と呼んでいます。

さらに、イスラーム式助け合いは、人知れずひっそりと行うことがのぞましいと考えられています。『クルアーン』の第2章271節の章句を見てください。

「ムスリムは喜捨きしよをあらわにしてもよいが、人目を避けて喜捨を行えばさらによい。」

日本では、災害が起こるたびに国内外から多額の義援金ぎえんきんが集まりますが、そのときにどの芸能人がいくら募金ぼきんをしたかが話題になります。場合によっては、あの芸能人は全然募金をしなくてケチだとか、お金持ちなんだからもっと募金をすべきだとか言われてしまいます。イスラームでは、誰がどれだけの喜捨をしたのかについては、人々の関心事にもなりませんし、喜捨をした本人もそれを世間に知らしめて誇るといふことを一切しません。」 1

あるいは、日本や欧米おふべいには、多額の寄付をした人の名前を建物の名前に付けて、寄付したことを称える文化がありますが、イスラームにはそれありません。イスラーム世界では、お金持ちの喜捨によって、町中に突如として大きな病院や学校が建つことがあります。そこには喜捨した人の名前は一切掲げられていないのです。次に示す『クルアーン』第2章第270節にあるように、アッラーは喜捨の行いをきちんと見てくださっているのです。喜捨した人は天国に行ける可能性が高まったことを密かに喜んでそれで満足しているのです。」 2

「ムスリムがどんな喜捨をしようと、アッラーは本当にすべてを知っておられる。」

このように喜捨をした人が誰であるかが社会的に見えないというしくみは、助けを必要としている人にとって利点があります。日本や欧米の助け合いのように、募金をした人の顔が見えてしまうと、助けを受けた人はどうしてもその人のために必要以上にがんばってみせたり、単にサボっているだけだから手厚い支援など必要ないといわれのしない批判を浴びて

B。

これに対して、顔の見えないイスラーム式助け合いでは、助けを必要としている人は、手を差し伸べてくれる人に負い目を感じないで助けを求めることができるという点で、気軽に利用しやすいのかもしれない。

先ほどの私に怒ってきたエジプト人は、もし助けてもらってありがとうと言いたいのであれば、人助けをしないという教えを作ったアッラーに感謝をすべきだ、とも言いました。このことは、イスラーム式助け合いが、人と人の間ではなくアッラーと人との関係の中で行われていることを端的に示しています。無利子銀行で見てきたように、商売では人と人との顔が見える関係を重んじるのに対して、助け合いでは人と人との顔が見えなくなるというのも面白い対比ですね。」 3

さて、こうしたイスラーム独自の助け合いの考え方は、私たちにどんなことを教えてくれるのでしょうか。私たちの社会でも、今、助け合いの重要性は以前にも増して重要になっています。金融資本主義による経済格差の拡大はもちろんのこと、日本では高齢化が進むことで助けを必要としている人が今後、さらに増えていくことが確実視されています。そうした助け合いを支えているのは、人々の稼いだお金です。」 4

一番身近な例は、税金をどれだけ取るかという問題です。皆さんも商品を買うときに消費税を払っていると思いますが、その税金は政府によってさまざまな用途に使われます。中でも社会保障費と言って、お年寄りや病気の人の、生活に困っている人に回すお金は年々増加していて、今、私たちが支払っている税金では足りなくなるくらいです。」 5

お金が足りない場合は、例えば、消費税の税率を今の10%から15%に上げることでまかなうことが考えられます。実際、1989年に日本で初めて消費税が導入されたときは税率が3%で、その後、段階的に引き上げられてきました。しかし、税率を上げて支払う税金を多くすることは、私たちが自由に使えるお金がそれだけ減ることを意味しています。消費税の税率を上げるときに、決まて議論になるのは、私たちはどれだけ他人のために自分の使えるお金が減ることに我慢できるかという問題です。

困っている人への支援の手をもっと手厚くしようとすれば、私たちはもっと我慢しなければならない。逆に、私たちがもっと自由にお金を使いたいのであれば、困っている人はより苦しい状況に置かれてしまう。ここでは、利己（自分の満足）と利他（人助け）

が激しくせめぎ合っている状況が生まれ、その結果、十分な支援が必要としている人のところに届きづらくなっているのです。

こうした状況は、一国の社会保障をめぐる問題だけで見られるものではありません。深刻化する気候変動問題でも、今の快適な生活水準を維持したい先進国と、温暖化による海面の上昇によって国の存亡の危機に立たされている太平洋の島国の間では、同じく利己（先進国の満足）と利他（島国を救いたい）のせめぎ合いが見られるのです。

そうした利己と利他の間バランスをどう取るのかに苦心している私たちの社会にとって、自分の目的を達成するために困っている人を助けるというイスラームの利己的利他精神は、利己と利他をうまい具合に両立する考え方としてとても魅力的に見えます。私たちの社会でも、自分のことを差し置いて献身的に人助けをしているすばらしい人は数多くいます。

しかし、自分のことを第一に考えたいと思うのは抗しがたい人間の性で、誰もが自己を犠牲にして人助けができるほど人間は強い存在ではありません。その点、同じ人助けができるのであれば、自分の欲望を無理して抑えないやり方でやってみればよいと言ってくれるイスラーム式助け合いの考え方は、人間の弱さに寄り添ってくれるもので、誰にでも理解可能なものではないかと私は思います。

（長岡慎介『イスラームからお金を考える』筑摩書房より）

注1 ムスリム……七世紀に始まった宗教であるイスラームを信じる人々。

注2 アッラー……イスラームにおける唯一神。

注3 イスラーム……ここでは、イスラームを国教とする国々や文化圏のこと。

注4 クルアーン……イスラーム教の聖典。

注5 喜捨……喜んで寺社や貧しい人に寄付すること。

注6 無利子銀行……アッラーの教えに従って利子を禁じている銀行。この文章より前で詳しく言及されている。

注7 献身的……自己を犠牲にしても他のために尽くすさま。

注8 抗しがたい……逆らいたい。

問1 ①とありますが、「イスラーム」の人々の間で助け合いが活発に行われるのはなぜだと筆者は考えていますか。五十字以内で、具体的に答えなさい。

問2 A・Bに入る表現として最もふさわしいものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

A

ア 大目玉を食らいました

イ 目から鱗が落ちました

ウ 目も当てられなくなりました

エ 目星を付けました

オ 目くじらを立てました

B

ア 肩で風を切ったりしがちです

イ 肩の荷が下りたりしがちです

ウ 肩入れしたりしがちです

エ 肩透かしを食ったりしがちです

オ 肩身が狭くなったりしがちです

問3 ― ②とありますが、「人知れずひっそりと」助けることは、助けを受ける人にとってどんな利点があると筆者は考えていますか。その利点を本文中から三十七字でぬき出し、はじめの三字を答えなさい。

問4 次の一文は本文中の「 1 5のいずれかに入ります。この一文を入れるのに最もふさわしいところを選び、1 5の数字で答えなさい。

そのお金をどのように助け合いに分けるのかを考えると常に議論になるのは、稼いだ人からどれだけのお金を助けが必要な人に回すかという問題です。

問5 本文の***以降の内容を【ノート】にまとめました。これを読み、後の問い(1) (3)に答えなさい。

【ノート】

○「私たち」の社会は a に苦勞している。

例 消費税に対する「私たち」の考え。

【利己】

b

【利他】

他人のために自分の使えるお金が減ることを我慢し、消費税を払って他人への支援を充実させたい。

自己の満足のために他人を見捨てるか。



激しくせめぎ合っている。

他人を助けるために自己を犠牲にするか。

○イスラーム独自の助け合いの考え方から、「私たち」の社会が学びとれること。

c

とらえ方。

(1) a に入る言葉を本文中から十九字でぬき出し、はじめとおわりの三字を答えなさい。

(2)

b

に入る言葉として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分の払った消費税は適切に使ってもらいたい。

イ
たくさん消費税を払って他人から感謝されたい。

ウ 困っている人を支えるために消費税を払いたい。

工 自分が自由に使えるお金を消費税にとられたくない。

消費税を払うことで自分の快適な生活を維持したい。

(3) 「私たち」の社会の助け合いのあり方について、イスラーム独自の助け合いの考え方からどのようなことを学びとれると筆者は考えていますか。「両立」という言葉を必ず用いて、「〜ということ。」につながるように、cに入る言葉を五十字以内で答えなさい。

c
に入る言葉を五十字

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

ルールが、町から村へ、村から平原へ、そして、山の間へと走っていました。

そこは、町をはなれてから、幾十マイルとなくきたところでした。ある日のこと、汽車が重い荷物や、たくさん人間を乗せて過ぎていきましたときに、レールのある部分に傷がついたのであります。

レールは、痛みに堪えられませんでした。そして泣いていました。自分ほど、不運なものがあるだろうか。毎日、毎日、幾たびとなく、重い汽罐車きかんしゃに頭の上を踏まれなければならない。汽罐車は、それをば平気に思っている。そればかりでなく、太陽が、身を焼くほど、強く照らしつける。日蔭ひかげにはいるとあせつても自由に動くことができない。太い釘くぎが自分の体をまくら木ぎにしつかりと打ちつけている。考えてみると、いったい自分の体というものはどうなるのであろうか……と、レールは、思つて泣いていました。「どうなさったのですか？」と、そばに咲いていた、うす紅色べにいろをしたのでしこの花が、はじらうように頭をかしげてたずねました。いつも、この花は、なぐさめてくれるのであります。こういうわれて、レールはうれしく思いました。

「いえ、さつき、汽罐車きかんしゃが、傷きずをつけていったのです。たいした傷ではありませんけれども、私は、身の上を考えてつくづく悲しくなりました。それで泣いていたのです。」と、レールは、答えました。

「まあ、そうでしたか……。あなたのような、強い方がお泣きなされるのは、よくよくのこととでございましょう。私どもだったら、どくなつてしまつたかしかない。そういうば、さつきたくさんの材木と、米だわらと、石炭と、なにかの箱を、いっぱい貨車に積んでいきました。そして、今日は客車もいつもより長かつたようでございました。山のあちらには、海があり、また、温泉などもありますから、そこへいく人たちでにぎわつていたのでしよう。それにしても、あなたの傷が、たいしたことがありませんで、ようございしましたこと。」と、花は、しんせつにいいました。

レールは、きらきらと光る顔を花のほうに向けて、

「やさしいあなたが、私をなぐさめてくださるので、どれほど、私は、うれしく思っているでしょう。あなたが、すぐ近くで咲かな

い時分はどんなに、私は、さびしかったでしょう……。」「と、日ごろは、いたって強く黙っていて、辛抱しているレールは、つい涙ぐましい気持ちになりました。

すると、うす紅色をした花は、いいました。

「しかし、私の命もそう長くはありません。このあつまで、私の体は、弱っています。長いこと雨が降らないのですもの。」「と、歎いたのです。

このとき、風が、レールの上をかすめて、花を揺すつていたのであります。

レールは、耳をすましながら、

「夕立がやってきそうですよ。遠方で雷が鳴っています。それは、あなたの耳には、はいりますまい。ずっと遠くでありますから。けれど私どもは、こうして長く、つづいていきますので、その音が伝わって聞こえてくるのです。」「といいました。

花は風に吹かれながら、

「ほんとうでしょうか。そうであれば、どれほど私はうれしかれませんか。」「と答えました。

このとき、花を吹いている風が良かったです。

「ほんとうですよ。今日は、こちらも降るでしょう。もうすこしたつと、雲がぐんぐん押し寄せてきて、あの太陽の光を隠してしまいますから。」「と、知らしてくれました。

レールは、熱くなった体を、早く水に浴びて冷したいと思いました。また、花は、早く、水を吸って死にそうな渴きをば、いやしたいと思いました。

しばらくすると、はたして、黒い雲や、灰色の雲がぐんぐんとあちらから押し寄せてまいりました。そして、青々としていた空をしだいに征服して、いつしか太陽の光すら、まったくさえぎってしまったのです。

焼けるように、赤くいろどられていた野は、急に涼しく、うす暗くかげつたのでした。その時分から雷の音は、だんだん大きく近づいてきたのでした。

レールも花も、声をたてずに、ものすごくなった空の模様をながめていました。雨がとうとう降ってきたのであります。雨は花に降りそそぎました。また、レールの上に降りかかりました。そしてレールの熱くなった体を冷やして、その傷痕を洗つてやりながら、

「まあ、かわいそうに……。」「と、雨はいいました。

レールは、涙ぐみながら、雨に向かつて、今日、冷酷な汽罐車に傷つけられたこと、太陽が、これまでというものは、毎日、毎日、用捨なく、頭から照りつけたことなどを話しました。すると雨は、こういいました。

「それは、お気の毒なことです。私はあつくなつていたあなたの体をひやしてあげました。私たちはもうじきにここを去らなければなりません。その後にはきつと月が出るであります。月は、太陽とはまったく気性がちがっています。そして、万物の運命をつかさどる力は、いまこそ太陽のようになくても、昔は、えらかったものだそうです。そのことを月に向かつてお話しなさい。月は、あなたが訴えなされたら、けつして悪いように取りはからいはいはなろうと思ひます……。」「と、雨は静かな調子でさとしてくれました。

はたしてほごなく雲が去り、そして降っていた雨は晴れてしまいました。あとには、すがすがしい夕空が青々と水のたたえられたように澄んで見えました。

その夜、平原を照らした月は、いつも見る月よりは清らかで、その光のうちには、慈悲の輝きを含んでいました。やさしい花は、雨にぬれたまうなだれて、早くから眠つてしまい、そしてその葉蔭のあたりから、虫の泣く声が流れていました。

去つていった雨が月にささやいてでもいったものか、月が、この平原を照らしたときは、まずレールの上に、その姿を映しました。レールは、月に向かつて、今日、自分を傷つけていった汽罐車があつたことを告げたのであります。

「どんな汽罐車であるかしのれないけれど、そんなことをしてしらぬ顔をしているとは冷酷な汽罐車である。私がいつて不心得をさとしてやるから、もし見覚えがあつたら聞かしなさい。」「と、月はいいました。

レールは、汽罐車の X を教えました。

月は、さつそく、町から村へ、村から山の間へというふうに、力のおよぶかぎり、レールの告げた汽罐車をさがして歩いたのです。

ちょうどその時分、鉄橋の上を走っている汽車がありました。月はその汽罐車ではないかと飛び下りてみましたが、X がちがっ
ていました。

月は海岸という海岸、野原という野原をさがしてまわりました。そして、いたるところに汽車が走っているのを認めました。貨車ばかりのもあれば、また客車に貨車がまじっていたのもありました。海岸では海水浴をしている人間もありました。彼らは、「ほんとうに、いい月夜だこと。」といって、砂浜でねころんだり、また暗い波の中を泳いだりしていました。客車の窓からは、人々が頭を出して、海の景色をながめながら、笑ったり、話したりしていました。

しかし、この汽車の汽罐車も、月のたずねている X ではありませんでした。こうしてほとんど同じ時刻に、地上をたくさん
の汽車が走っていましたが、レールのいつた汽罐車は、トンネルの中へでもはいっていったものか、つい月の目にはとまりませんでした。
た。

涼しい一夜を送って、レールは、もはや、昨日の苦痛を忘れてしまいましたけれど、約束をした月は翌日の夜も、レールを傷つけた
汽罐車を探してまわったのでした。すると、ある停車場の構内に、ここからは、遠くへだたっている平原の中のレールから聞いた
番号の汽罐車がじっとして休んでいました。

月は、さっそく、汽罐車の上へたどりつきました。そして、いつものように、静かな調子で、
「どうして、そんなに、沈んで、じっとしているのだ。」といって、たずねました。

汽罐車は、月に、こういつて話しかけられると、はじめて、口を開きました。

「私はどんなに、疲れているかしれません。毎日、毎日、遠い道を走らせられるのです。そして昨日は、いままでになく重い荷を
つけさせられていたので、一つの車輪を痛めてしまいました。私は、あの重い荷物と車室の中で、そんなことには無頓着に、笑つ
たり、話したりしていた人間が、憎らしくてしかたがありません……。」と訴えたのであります。

「そんなら、おまえも、体をいためたのか?」と、月は問いました。

「そうです。どこかでレールとすれ合って、一つの車輪を傷つけました。」と、汽罐車は答えました。

月は、それを聞くと、だれが悪いということができなかった。そして、レールを傷つけたといつて汽罐車をしかることもできなかつ
たのであります。

「その荷物は、どこまで載せていったんですか。」と、さらに月はききました。

「どこといつて」ところではありませんでした。大きな箱は、港の駅までつけていき、また石炭や木材は、ほかの町で降ろしました。」
と、汽罐車はいいました。

「どうぞ、お大事に……。」といつて、月はこんどは、港のほうへまわったのであります。すると、いま、汽船が煙をはいて出よう
としていました。その船には、大きな箱がいくつも載せられてありました。月は、さっそく、船の上へやってきて、箱を照らしたの
であります。

「これからどこへいくのですか。」と、月はたずねました。箱は、黙って、物思いに Y いましたが、

「私たちは、どこへやられるのかわかりません。故郷を出てから、長い間汽車に載せられました。そして、いまこの広々とした海
の上をあてもなく漂っているのを見ると心細くなるのであります。」と、箱は答えたのです。

月は、そこで、いったいだれが悪いのかと考えました。そこで、こんどは、人間のようすを見とどけようと思いました。そして、
街へ降りて、あたりを見まわしましたが、もうだいぶんおそかったとみえて、みんな窓がしまっていました。一軒、二階の窓がガラ
ス戸になっているのがありましたので、月はそれからのぞきました。すると、そこには、かわいらしい赤ん坊がちょうど目をさまし
て、月を見て喜んで、笑っていたのであります。

(小川未明「負傷した線路と月」『小川未明童話集』所収 角川春樹事務所より)

注1 幾十マイル……一マイルは約一・六キロメートル。

注2 用捨なく……「容赦なく」と同じ。

注3 不心得……心がけが悪いこと。

問1 — ①とありますが、「レール」が「泣いていた」理由としてふさわしくないものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。
ア まくら木に強く固定されている自分の体は、たとえ強く太陽に照り付けられても逃げる（に）ことができず、この先どのような
てしまおうのか不安を覚えたから。

イ たくさんの人間を乗せた汽罐車によってつけられた傷は、痛み以外のことを考えることができないほどひどいもので、自分
は我慢（がまん）することができないものだったから。

ウ 連日のように汽罐車に頭を踏まれてしまう毎日を送っているにもかかわらず、踏んでいく汽罐車にそのことを気かけられる
こともないという自分の境遇（きようぐう）を悲しく思ったから。

エ 身を焼くほどの太陽に照らされても、それを避（さ）けることすらできない自分の身の上を嘆（なげ）いていたところ、「なでしこの花」に
なぐさめられて心が動いたから。

オ 重い荷物やたくさんの人間を乗せた汽罐車に通り過ぎられたことでついた傷に痛みを感じ、かつ自由に動くことすらできない
自分を運の悪いものだと考えたから。

問2 — ②とありますが、本文中の「月」という存在の説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 当の「レール」自身が苦痛を忘れてしまったとしても、約束したことをしっかりと守ろうとする律儀（りちぎ）な存在。

イ 「レール」の話を聞き、「レール」を傷つけた存在をつきとめて、さとしてあげようとする正義感の強い存在。

ウ 色々なものに問いかけて話を聞くものの、答えを一つに決めつけることなく考え続けようとする存在。

エ 「レール」から話を聞いて同情の涙を流し、「レール」を傷つけた汽罐車を力を尽くして探す慈悲（じひ）深い存在。

オ かつては全てのものの運命をつかさどる偉大（いだい）な力を持つものであったと、言われている存在。

問3 —

X

 に共通して入る言葉を本文中から二字でぬき出して答えなさい。

問4 — ③とありますが、それはなぜですか。「汽かん車」という言葉を必ず用いて、百字以内で答えなさい。なお、本文中では
「汽罐車」と表記されていますが、解答する際は「汽かん車」と書きなさい。

問5 — ④が「考えごとに深く没頭（ぼつとう）して他のことに手がつかなくなりましたが」という意味になるように、

Y

 に入る言葉を
本文中から三字でぬき出して答えなさい。

問6 — ⑤とありますが、「月」がこのように行動した理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 「月」は、汽罐車から話を聞き、港にまわって「箱」と対話をしたところ、広い海の上を見通しもなく漂わせられている「箱」
の境遇に同情し、その境遇を改善してあげたいと考えたから。

イ 「月」は、汽罐車をさそうと考えていたにもかかわらず、それが果たせなかったため、別のさす対象を探していたところ、
まだ人間から話を聞いていないことを思い出したから。

ウ 「月」は、汽罐車から話を聞いて、だれのせいで汽罐車が傷ついたかが判断できず、また「レール」と同じく汽罐車とも約
束を交わしたので、その約束を果たそうとして人間から話を聞くとうとしているから。

エ 「月」は、汽罐車から聞いたことをもとに、これからどこへ向かうのかを「箱」に聞いたが、「箱」自身も分かっておらず、「箱」
の行く先を知るために人間からも話を聞きたいと思ったから。

オ 「月」は、汽罐車から話を聞いて、大きな箱を探していたところ、「箱」を見つけて話を聞き、「箱」にも事情があると考え、
人間からも話を聞きたいと思ったから。

問7 次の【引用文】は、本文の解釈を示した論文の一部です。この【引用文】の内容をまとめた【ノート】と、【引用文】を読んだ五人の生徒の【会話文】について、後の問い(1)～(3)に答えなさい。

引用文

汽罐車を探す中で問題の連鎖が見え、月は最も罪なき存在にたどり着き、「誰が悪いのか」という問いに答えがないことに気づく。

ところで、汽罐車が「憎らし」と訴える「笑つてゐる」人間の様子」は、既にそれ以前の別の場面で示されていた。

仮にこの人間達の情景を結末に持ってくれば、話は実に懲悪的になる。が、あえてそうはせず別の箇所^{かしよ てんひよう}に点描しておくことで、^bの笑みは大人の人間達の笑いとの対比で出てきていることが示された。〈童心〉を最後に持ち出すことによって、物語は問題の責任を性急に人間一般^{いっばん}に帰すことを回避したのである。

(木村小夜「小川未明「赤い蠟燭と人魚」とその周辺」『福井県立大学論集』第二十九号より)

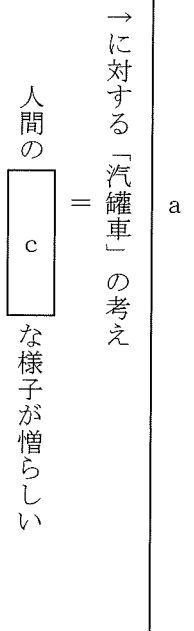
【ノート】

引用文について

○「^b」も「最も罪なき存在」

→ ← 両者が対比されている

○「大人の人間達」



【会話文】

生徒A—「文章」を読んで、すこしこの小説のことが分かった気がするよ。つまり、「だれが悪いのか」わからなくなった「月」の存在を、何もわからない「最も罪なき存在」と重ねあわせることで示そうとしたんじゃないかな。

生徒B—そうかな。ぼくは「文章」の中で対比として説明されているように、「最も罪なき存在」とそれ以外の「大人の人間達」が比べられることで、より「人間」たちのひどさが強調されているラストになっていることが主張されているように感じたな。

生徒C—うーん、たしかに「文章」では「最も罪なき存在」と「大人の人間達」の笑いが対比されていることが示されているけど、一方で「最も罪なき存在」がラストに登場することで、問題はそう単純に考えられることではないと解釈されているのではないかな。

生徒D—その考えもどうか。文章では「懲悪的」という言葉が使われているように、結局のところ登場するものたち全員に悪いところがあるのだから、みんなが反省しなければいけないことが論じられていると思うよ。

生徒E—いずれにせよ、文章では〈童心〉というものの重要性が強調されているよ。結局のところ、純真な心で「レール」のために力を尽くしてくれる「月」や「レール」を優しい言葉でなくさめてくれるでしこの花のような存在が大事だと論じられているのだろうね。

(1) 引用文 ・【ノート】の中の a にあてはまる連続する二文を本文中からぬき出し、はじめの三字を答えなさい。

(2) 引用文 ・【ノート】の中の b・c にあてはまる言葉を、本文中から五字以内でぬき出して答えなさい。

(3) 【会話文】 の生徒五人の発言のうち、引用文 の内容にあてはまるものを一つ選び、A～Eの記号で答えなさい。

このページに設問はありません